

超高齢化の過疎集落で 地域おこしを模索する

福江島



坂本 吉晴 (さかもと よしはる)

通潤橋(国の重要文化財指定)で有名な熊本県山都町出身。公立学校教員(3年間台湾高雄日本人学校勤務)として33年間勤める。家族は福岡県太宰府市に暮らす。平成23年10月~26年9月まで協力隊として活動中。



地域住民、保育園児、幼稚園児といっしょに、こいのぼりを空におよがせる。

◆田舎暮らしの夢と人の役に立ちたい想いが重なった

将来は、自然豊かな環境の中で、移住を視野に入れた田舎暮らしをしたいというのが夢でした。

島との出会いは、五島市で開催される「つばきマラソン大会」などのイベントに参加したことからでした。回を重ねて参加する中で、五島市民のあたたかいおもてなしや、島の自然豊かな環境に感動し、やがて魅了されていきました。東日本大震災のボランティア活動を約一ヶ月体験し、被災された方々の想いや生きざまに触れる中で、微力ながらも何らかのかたちで社会、なかでも困っている人のために何かをしたいという想いが募っていきました。そうした時期にちょうど、五島市地域おこし協力隊の募集記事が西日本新聞に掲載されたのです。すぐに応募しました。

◆地域との信頼関係づくりからスタート

私が活動することになった琴石地域は、福江島の南端に位置する高齢化率九〇パーセントという典型的な過疎化・高齢化集落です。

単身赴任する前に行われた市の住民への説明会では、「五島市ではじめての事業(モデル事業)で、地域や住民の生活支援などが主な活動である」ことが説明されていました。しかし、五島市としての明確なビジョンやミッションがあ

ったわけではないようです。なにしろ「習うより慣れよ」で、集落支援員的な立場で協力隊の活動がスタートしました。

赴任後、まず取り組んだのが現状調査です。地域や住民が抱えている課題が何であるのか、集落を巡回しながら、情報収集に努めました。

そこからみてきたのは、

- 住民の減少・高齢化（一人世帯約半数）↓生活力低下↓
- 地域運営を維持することの困難↓耕作放棄地の増加
- ひと・もの・こととの地域内および地域外との交流・活用・発信がない↓過疎化

という二点でした。

そこで、半年間は、地域との信頼関係づくりを進めて、その信頼関係を基盤に、右のふたつの課題にできるところから取り組んでいくことにしました。地域の活性化へつなげるには、どうしたらいいか？ 暗中模索しながらの活動スタートでした。そして地域おこしのキーワードとして、「交流・支援」「活用・生産」「広報・発信」を掲げました。

◆安心・安全から、交流、そして地域活性化へ

まず取り組んだのが、地域との信頼関係をつくり、地域住民の安心・安全な日常生活の暮らしを支援することでした。具体的には、つぎのようなことでした。

① 地域環境整備・景観活動 半年間の主な活動は、刈り払

い機で草刈り作業をすることで、私はそれまで刈り払い機を使ったことがなかったので、長時間の作業に体力勝負の訓練でした。時には郷長さんはじめ住民とともに、墓地や国道沿いの斜面の雑草を払い、竹藪を伐採し、山ツツジ約七〇本を移植、アジサイの挿し木約一二〇本を植えました。当時の郷長さんは「この事業がなかったらできなかつたこと」と感慨深げにふり返っていました。現在伐採後もこまめな作業をつづけ、景観を維持しています。

また、耕作放棄地を復元するために、景観作物（レンジソウ、ヒマワリ、コスモス）の植栽や、旬の野菜づくりにも取り組んでいます。

② 住民の安心・安全な生活支援 とくに一人世帯の生活支援を中心に、日常的な安否確認のために「黄色い旗」の掲揚（朝起きて元気であれば黄色い旗を玄関先に掲げ、日没にしましう活動）を習慣にしてみました。

これは家内の発案で、旗を手づくりしてくれました。

いまでは、ほかの住民も旗が掲げているかを気にかけてくれています。

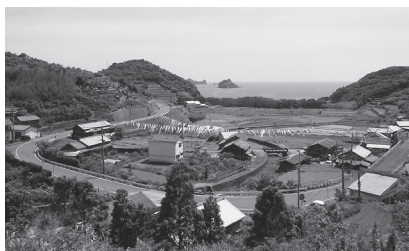


長崎の西100kmの東シナ海にある五島列島の主島。琴石地区は、島の南西部の旧富江町にある集落。

また、一人世帯の食事会や誕生会を企画実施しました。定期的に公用車（軽ワゴン四人乗り）での通院・買い物などの支援も行っていきます。

③ **社協との連携** 地元社協と県社協から、「過疎地域の福祉力を高める研究事業をやらないか」との話がありました。まずは地域内の交流会を企画・開催しました。開催当日はほとんどの住民が集まり大盛況でした。住民からは「楽しかった。続けてほしい」などの声が多数あったため、翌月から「琴石つばき会」としていきいきサロンを毎月開催するようになりました。社協とともに住民の困りごと調査をしています。日常的に声を掛けあったり助けあつていくためのしくみもつくりました。

④ **地域活性化行事**（日本の伝統的な季節行事の催し） こののぼりの掲揚は今年で三回目になります。こいのぼりの寄付を呼びかけたら最高二〇二匹（五島市民九割、島外一割）が集まりました。支柱を設置したり、掲揚ロープにフックを取り付けるなど、住民と協力して毎年掲揚しています。昨年と今年は、保育園児、民生委



琴石集落の空におよぐこいのぼり。

員、五島海陽高校生などの地域外ボランティアとの交流も企画しました。二〇〇匹ものこいのぼりがロープで一斉に掲揚される瞬間は圧巻です。普段は静寂な琴石集落にこいのぼりが掲揚される約一ヶ月間、とくには多くの見物客で賑わいます。家族連れや団体客が、

こいのぼりの下で昼食をしたり、国道沿いに車の列がなぶなど、年々盛会になってきました。

また、七夕飾りやかかしづくりと設置、お雛さま飾り展示などの企画で地域内外の交流も活発になりました。

◆生産活動をよみがえらせる

むかしから島の人が行ってきた生産活動をよみがえらせて維持する取り組みも行っていきます。

① **炭焼き** 一時途絶えていた伝統的な炭焼き窯を活用して、炭焼き技術が失われないように伝授して継承されるように取り組んでいます。木炭や竹炭の加工をすることで、一部商品化に向けて試行錯誤しています。



毎年3月、約200体の雛飾りを集会所に設置。多くの市民や観光客が足を運ぶ。

② 耕作放棄地復元

サツマイモの苗植・旬の野菜づくりを行っている。田植えや収穫は、高校生や園児たちの農業体験を実施。収穫後は、高校・幼稚園・保育園の文化的行事などで活用する予定です。また、五島市特産品であるかんころ餅を住民の方につくっていただいたり、福祉施設への提供なども企画しています。

③ ニホンミツバチの再生

昨年からニホンミツバチの捕獲に挑戦。今春、分蜂群（二箱）の捕獲に成功しました。蜂蜜収穫後、住民と蜂蜜を味わう企画を予定しています。

④ 「角すし」 琴石の伝統

郷土料理である「角すし」は酢を一切使用せず、琴石の椿油（〇〇パーセント）使用でつくる絶品の味覚高級料理です。この「角すし」のレシピをつくり伝統を継承しています。

◆ 広報・発信も積極的に

① 広報活動 「地域だより琴石」を発行して、広報・発信に努めています。私の日々の活動や、住民の日常生活・



伝統郷土料理の「角すし」を住民とともにつくる筆者（中央）。

地域の行事などを写真に収め、A4判カラー印刷で毎週発行。現在一九一号を重ねました。各世帯を戸別訪問して配布しています。創刊号から大切に保管されている世帯がほとんどです。

また、関係方面へメール配信し、五島市地域おこし協力隊のフェイスブックにも投稿して反響をいただいています。

② 地域メディアの活用

イベントがあるごとに、テレビや新聞などのマスコミに大きく取り上げられ報道されることは、琴石地域の認知度が高まるとともに、住民の笑顔や元気にもつながり、生きがいにもなります。また、地域の活性化や島内外の子どもや孫から電話連絡をもらったり、盆正月の帰省などにもつながっているのではないかと思います。

◆ 地域おこしの原点をめざして

今年四月、これまでの活動に対するアンケート調査を全世帯で実施しました。これは、私の協力隊員としての活動の検証でもあります。住民の活動への評価は総じて高く、とくに一人世帯の方からは、任期終了後に「生活は安心して安全に暮らせるか」についての不安の声があがっています。こうした声は行政に対する強い期待感の表れと感じています。「何のためにこの事業を行うのか、過疎化・高齢化地域をどうしたいのか」という行政側の明確なビジョン

受け入れ側からみた隊員の活動

●島の現状

五島市は九州の最西端に位置し、福江島をはじめとした11の有人島と52の無人島で構成されている。青く美しい海と緑豊かな自然環境に恵まれた海洋都市で、福江島の南西に富江町琴石地区がある。琴石地区は、現在、23人15世帯でいちばん若い人が60歳と、過疎化の進行が著しく全国きっての限界集落である。また、五島市合併前の旧富江町と旧玉之浦町の中間に位置し、立ち止まることの少ない地区である。五島市で地域おこし協力隊事業を活用したいと考えたとき、急激に過疎化が進んでいるが、引っ張り役がいれば地域がまとまる可能性の高い地区への配置が最適と考え、琴石地区を選んだ。

●隊員の活躍

平成23年10月、坂本さんは地域おこし協力隊として琴石地区の住民となり、活動の三本柱「交流・支援」「活用・生産」「広報・発信」に取り組み、みごとに地域を活性化させることができたのではないかと思う。しかし、高い評価だからこそ任期満了後の不安も大きい。その不安を払拭するためには、地域と行政、関係団体そして坂本さんが一体となり、任期満了後の体制を構築することで、現在の活き活きとした琴石地区が継続すると思う。

五島市で地域おこし協力隊を受け入れて率直に感じたことは、「協力隊」「地域」「行政」の役割を明確にすることが重要であるということだ。

- 「協力隊」は、その地域でできることを明確にし、地域に溶け込み、自身や地域の将来を考えた取り組みを行うこと。
- 「地域」は、協力隊配置の意義を理解し孤立させず、3年後の地域と協力隊の目標を共有すること。
- 「行政」は、導入の目的・意義を明確化し他部署と連携を図り、協力隊をサポートすること。

●これからへ向けて

「総務省ミッション2014」が打ち出されているが、地域活性化に向けたソフト事業は、一丁目一番地の最優先事項である。全国では約1,000人の協力隊が活動され、長崎県内には6市3町の合計33人（2014年4月末）の隊員が活動しており、九州管内では最も多い。その中でも五島市は、琴石地区をふくめ7名の地域おこし協力隊がその地域の課題解決に向けた取り組みを行っているが、うち4名は市の重点施策である体験型観光事業に取り組んでいる。この事業こそが「地域を知る・人を知る・地域に溶け込む」という利点をもち、これが軌道に乗って地域の活性化が図られることで、協力隊の存在意義も高まるのではないかと思う。今後、それぞれの隊員が順次任期満了を迎えるが、その後も地域が継続して元気を保ち、隊員もスムーズにつきのステップへと向かえることが、地域おこし協力隊事業の本来の趣旨であり、あるべき姿だと思う。その姿を目指して「協力隊」「地域」「行政」が一体となって地域を元気にしていきたい。

（長崎県五島市市長公室 野口 語）

が必要だと思えます。

五島市の人口は年々減少しつつあります。高校卒業後のほとんどの若者が島外へ出て行ってしまいます。

子どもたちが地域住民と交流して原体験をもつことで、地域を知って地域のよさを伝えていくことは、とても大切なことです。そうした活動は、将来、島出身の子どもが大人（親）になったときに、五島市とどう関わっていくのかにつながっていくのではないのでしょうか。

「こんな田舎の不自由な所に来てくれてありがとう。ほんとうにいい人がやってきた。私たちは地域おこし協力隊の

協力隊なんだから何でもするよ。坂本さんの活動で琴石集落が明るく変わってきた。長生きしてよかった」

そんな住民の笑顔・元気な姿や感謝の声を聞くたびに、活動の苦勞が癒されて、新たなエネルギー源となり、生きがいを感じます。

今後、残された時間（今年の九月末で任期終了）を地域とともに住民が安心して安全に生活しやすい環境づくりに少しでも努めることが、地域住民の生きる意欲と生きがいにつながるの思いです。同時に「五島市の地域おこし」の原点になれたならと願っています。